

テーマで特集を組むなどしたもの、この時点では議論のみに止った。大観の意見が実効を奏するのは昭和十九年本校改革の際においてである。

本校第一期生にして岡倉天心の遺志を継ぐ者たらんとする大観は、本校に対して常に関心を寄せていた。大観と対立する人々の間に「大観は美校を乗取ろうとしていた」ということが言われたが、小杉放菴の日記『日本美術院百年史』第四巻。平成六年、日本美術院の次の記述を見ると、それも全く事実無根とは言えないのではないかと思われる。

〔大正九年九月七日〕……白〔吉田白嶺〕君近来帝国美術院の大観、観山両君に對する運動に就て憂惧してあり。予にすゝめて大観君を説いて金モールの思ひを断たしめんとす。平常ならば易き事ながら此際いたしかゆし也。されど同行して茅町を訪ひ、談此事に及べば、大観氏、いや何等の觀誘も未だ受け居らず。若しその如き交渉あらんには、美術学校を全部予等の手に渡しなば命を拜せんと答へんと云ふ。老雄壮快也。

〔同年十月四日〕……途大観君を訪ふ。大観君南次官について談る處あり。次官は大観君を帝展に拉致せんとし大観君はさらば美術学校を全部任せよと云ふ。是は出来ぬ相談也。予、次官大英断をもてそれを決行したりとて、大観君は黒田〔清輝〕氏以下の大朋黨と恨を構へざる可らず。此事云ひ易からず。日本畫部を全部任せ、次に工藝部を削り去る位の處にては折合はずや。その後油繪黨と事を構ふるの勢とならば強きもの正しきも〔の〕敗

れざるべし、と云ふ。大観君もそのやうなる心あるらし。……

### ⑥ 人事刷新

昭和七年には校長の更迭とともに、「学校近事」に記されているように広範囲の教員異動があった。異動後の職員は次のとおりである。

#### 職員

校長	和田 英作	東京
名譽教授	高村 光雲	東京
	正木 直彦	東京
	久米桂一郎	佐賀
主任教授	川合芳三郎	東京 東玉堂
教授	結城 貞松	東京 東素明
教授	松岡 輝夫	東京 東映丘
教授	平福 貞藏	東京 東百穂
理事教授	小泉 勝爾	東京 東青堂
助教授	山田 廉崎	東京 玉
助教授	常岡 文龜	兵庫
主任教授	岡田三郎助	東京
教授	藤島 武二	鹿兒島

油畫(彫刻科兼擔) 理事教授 小林 萬吾 東京

油畫(圖畫師範科兼擔) 教授 南 薰造 廣島

油畫(建築科兼擔) 教授 田邊 至 神奈川

油畫(圖畫師範科及工藝科) 助教授 岡 四郎 東京

油畫(豫科及本科擔任) 助教授 伊原宇三郎 德島

彫刻科 塑造部

塑造(工藝科本科兼擔) 主任教授 建昌彌一郎 和歌山 號大夢

塑造(工藝科豫科及本科擔任) 教授 沼田勇次郎 東京 號一雅

塑造(建築科兼擔) 教授 朝倉 文夫 大分

塑造(木彫部兼擔) 理事教授 北村 西望 長崎

塑造 教授 和田 季雄 東京 號東光

塑造(木彫部兼擔) 生徒主事 和谷 昇 香川

木彫部

木彫(圖畫師範科) 理事教授 關野金太郎 神奈川 號聖雲

木彫 講師 羽下 修三 新潟

工藝科 圖案部

圖案 主任教授 和田 三造 福岡

圖案法、圖案(日本畫、油畫、建築、工藝) 理事助教授 廣川松五郎 新潟

圖案(工藝科豫科兼擔) 助教授 森田 武 東京

圖案(日本畫、油畫、建築、各科兼擔) 講師 羽野 禎三 石川

工藝科 彫金部

彫金、金工製作法 主任教授 清水 龜藏 廣島

彫金(在外研究中) 理事教授 海野 清 東京

彫金(工藝化學) 木炭畫(工藝科豫科) 助教 深瀨 嘉臣 東京

彫金助手 雇 宮坂福太郎 東京

工藝科 鍛金部

鍛金 主任教授 石田 英一 佐賀

鍛金 理事助教授 野口 六三 東京

工藝科 鑄金部

鑄金、西洋工藝史各論(共通學) 主任教授 津田 信夫 千葉 號千壽

鑄金、塑造(工藝科豫科) 理事助教授 高村 豐周 東京

鑄金(化學教室兼務) 助教授 內藤 春治 岩手

鑄金製作法 講師 杉田 精二 長野 號禾堂

鑄金、鑄金製作法 講師 丸山 義男 山形

工藝科 漆工部

蒔繪、調漆、漆工製作法 主任教授 六角注多良 東京 號紫水

蒔繪、調漆 助教授 松田 權六 石川

蒔繪、調漆 理事助教授 山崎覺太郎 富山

工藝化學 講師 澤口 悟一 宮城

蒔繪、調漆 講師 磯矢 陽 東京

建築科

建築製圖、日本建築、西洋建築史、家具史、西洋文様史(共通學科兼務) 主任講師 大澤三之助 東京

構造力學、數學、建築製圖、建築構造 教授 森井 健介 東京

建築製圖、構成原理、建築裝飾、木炭畫 助教授 水谷 武彦 東京

東洋建築史 講師 關野 貞新 新潟

施工法、建築材料學 講師 北村 耕造 京都

建築製圖、圖學(彫刻、工藝科兼授)

建築計畫

講師 金澤 庸治 東京  
講師 岡田捷五郎 東京

圖畫師範科

日本畫(日本畫科擔任)

主任 教授 結城 貞松 東京  
教授 多賀谷健吉 東京

日本畫、油畫、教授法、教授練習

日本畫

教授 平福 貞藏 東京  
教授 南 薰造 廣島

油畫

教授 關野金太郎 神奈川  
號聖雲

木彫

教授 松田 義之愛 知

手工

理事 助教授 松垣 羈雄 大分

日本畫

助教授 伊原宇三郎 德島

油畫

助教授 小塚新一郎 神奈川

教育學、哲學概論、心理學

習字

講師 比田井 鴻長 野

習字

講師 比田井元子 長野

共通學科

西洋美術史

主任 教授 矢代 幸雄 神奈川  
生徒主事 佐々木 卓三 重

修身

理事 教授 森田龜之助 東京  
生徒主事 田邊 孝次 東京

西洋繪畫史、英語

教授 青山 新兵 庫

東洋美術史、西洋工藝史

理事 助教授 西田 正秋 滋賀

西洋彫刻史、西洋美術史

助教授 香取秀治郎 東京  
號秀眞

解剖學

講師 村田 良策 栃木

金工史

講師 香取秀治郎 東京  
號秀眞

英語、美學

講師 村田 良策 栃木

日本文樣史

東洋繪畫史

佛語

東洋文學

圖學

圖學

修身

工藝化學

東洋工藝史

體操教練及武道

教練

體操、教練

體操、教練

弓道

劍道

柔道

講師 小場 恒吉 秋田

講師 鎌倉芳太郎 香川

講師 新 規矩男 三重

講師 正木 篤三 東京

講師 白川 一郎 香川

講師 鈴木 信一 山口

講師 高島 米峰 東京

講師 蒔田 宗次 三重

講師 高橋 義雄 東京

助手 加藤 金美 東京

配屬將校 陸軍砲兵中佐 奧野 由郎 兵庫

講師 齋藤 幸晴 秋田

囑託 清水 平吉 東京

囑託 本多 利時 東京

囑託 橋本 統陽 茨城

囑託 大江 雄五 山形

經理課

課長 教授 津田 信夫 千葉  
(兼)助教授 青山 新兵 庫

庶務掛

掛長 書記 宮本 純一 茨城

雇 西原多喜雄 福岡

雇 渡邊 正實 靜岡

會計掛

掛長 書記 筒崎 謙齋 秋田

(兼)書記 佐藤 重吉 東京

書記 瀨谷 義廣 東京

(兼)講師 金澤 庸治 東京

雇 野末 武靜 岡

雇 片山 米藏 新潟

雇 武田 壽 東京

雇 佐々木 一郎 秋田

雇 川村 昇福 岡

臨時雇 古俣 靜江 東京

生徒掛

雇 中原 芳子 岡山

掛長 生徒主事補 高橋 吉雄 岩手

雇 佐々木 總一郎 岩手

文庫課

課長 教授 矢代 幸雄 神奈川

(兼)講師 新 規矩男 三重

(兼)講師 正木 篤三 東京

圖書掛 標本掛

掛長 講師 石澤 正男 東京

書記 佐藤 重吉 東京

囑託 中根 勝 東京

雇 兼田 稔 神奈川

雇 鳩ヶ谷 敏治 埼玉

雇 井上 みちよ 山形

雇 村内 政雄 東京

(『東京美術学校一覽 從昭和八年 至昭和九年』より転載)

教務課

課長 生徒主事 兼教 佐々木 卓三 重

教授 多賀谷 健吉 東京

(兼)教授 兼 森田 龜之助 東京

(兼)生徒主事 田邊 孝次 東京

(兼)教授 兼 和田 季雄 東京

(兼)生徒主事 和

教務掛

掛長 書記 北浦 大介 奈良

(兼)講師 齋藤 幸晴 秋田

囑託 増井 兼吉 東京

(兼)講師 入谷 昇香 川

(兼)囑託 清水 平吉 東京

昭和七年新採用者(図画師範科教官以外)について言えば、

新規矩男は三月三十一日に講師(西洋文学、フランス語担当)に

採用された。彼は明治四十年七月三十日三重県に生まれ、広島陸軍

幼年学校、陸軍士官学校予科、第一高等学校を経て昭和四年東京帝

国大学文学部美学美術史学科に入學、同七年三月卒業して直ちに本

校に採用された。

正木篤三も同日講師（東洋文学担当）に採用された。彼は明治三十八年八月十九日正木直彦の三男として東京に生まれ、東京府立第四中学校、第一高等学校を経て大正十五年東京帝国大学文学部東洋史学科に入学、のち国文学科に転じて昭和五年三月卒業し、直ちに美術研究所所員となり、次いで本校講師となった。

入谷昇は四月十五日に教務嘱託（彫刻科勤務兼教務掛）に採用された。彼は明治二十一年九月三十日香川県に生まれ、同県工芸学校を経て本校彫刻科に入学、明治四十四年卒業以後は自営し、大正七年から同十年まで世界玩具株式会社原型部主任をつとめ、昭和四年七月以降は田端の板谷波山工場に勤務していた。彼は北村西望、和田季雄の推薦により起用された。

内藤春治は六月三十日に講師（鑄造実習担当）に採用された。彼は明治二十八年四月一日岩手県に生まれ、大正五年盛岡市私立商業学校を卒業後直ちに南部鑄金研究所に入り鉄器鑄造を研究し、同八年上京して香取秀真に師事。翌九年本校鑄造科に入学して同十四年に卒業した。研究科に在学中、パリ万国裝飾美術工芸博覧会、商工省主催工芸展覧会、帝展第四部等に入賞、入選し、昭和四年以降本校助手（工芸化学教室勤務）をつとめていた。

深瀬嘉臣も同日講師（金工実習担当）に採用された。彼は明治三十二年九月十八日東京に生まれ、京北中学校、東京府立工芸学校を経て本校金工科に入学、大正十二年に卒業した。同十五年以來本校助手をつとめていた。

羽野禎三も同日講師（図案実習担当）に採用された。彼は明治三十五年九月十五日石川県に生まれ、同県立工業学校を経て本校図案

科に入学、昭和二年に卒業して直ちに助手となった。

高野重人（号松山）も同日講師（工芸製作法担当）に採用された。彼は明治二十二年五月二日熊本県に生まれ、京都市立美術工芸学校漆工科を経て本校漆工科に入り大正五年卒業。同八年本校雇（教授白山松哉付き助手）、次いで助手となった。

白川一郎は四月三十日に講師（用器画法、遠近法担当）に採用された。彼は明治四十一年七月十四日香川県に生まれ、丸亀中学校を経て本校西洋画科に入学、昭和七年卒業した。小林万吾と鈴川信一の推薦によって本校に採用された。教職科目の用器画法と遠近法の授業はこの白川と、鈴川信一（退官後昭和七年五月十日付で講師として再起用）が担当することになった。前に鈴川とともにこの二科目を担当していた助教長野新一は病気のため欠勤が続いていたところ、五月十一日に休職を命ぜられた。

南薫造は西洋画科教授和田英作が校長となって空席が出来たため、八月三十一日、後任として起用された。彼は明治十六年七月二十一日に広島県に生まれ、同県第一中学校を経て本校西洋画科に入学、同四十年卒業して間もなくイギリスに留学し、ポロージョンに洋画技法を学び、同四十二年にはフランスへ移り、また、欧州各国を巡歴して翌四十三年に帰国した。大正四、五年には美術研究のためインドを旅行し、大正五年以降は文展、帝展審査委員をつとめ、昭和四年に帝国美術院会員となった。

#### ⑦ 男女共学実施計画

昭和六年度年報の「将来施設上重要ト認ムル件」に明らかかなよう